## ４　認知症施策の推進

本県における認知症の人の数は、平成２（2020）年４月現在で約２万２千人と推計されています。今後も高齢化の進展に伴いさらに増加が見込まれています。

このような中、認知症の本人の意思を尊重すること、子どもから高齢者まですべての人が認知症について正しく学び、誤解や偏見をなくしていくこと、認知症の気づきの段階からその後の進行、終末期に至るまで、手厚く途切れることのないサポート体制をつくっていくことにより、認知症になってからも希望と尊厳を持って、自分らしく暮らし続けられる地域づくりを推進していきます。

### （１）認知症の本人の意思の尊重

**【現状と分析】**

従来の認知症施策は、認知症の人を支える側が中心となって企画・立案・評価を行ってしまいがちであり、認知症の本人から直接希望や意見を聞き施策に反映することが求められています。

認知症の本人が真に求める施策を展開していくためには、認知症の本人の視点を重視することが必要です。その方法論を検討した国の研究事業によると「本人ミーティング」（本人が主体となって、出会い、思いを語り、意見を述べ、政策に影響を与え、地域づくりに参画することを目的とする会議）が有効と言われています。

**【第８期における方向及び対応】**

**ア　認知症の本人の意見の施策への反映**

認知症施策を企画・立案し、またその評価を行うにあたり、認知症の本人が本当に必要とされている施策となるよう、認知症の本人の意見を重視します。

例えば、認知症施策等を検討する会議などに、認知症の本人が参画して意見を述べたり、「本人ミーティング」など本人どうしが集まって自由に意見を出し合える場を設けるなど、本人の思いを施策につなげていきます。

特に認知症の本人が会議などに参加場合は、本人が発言しやすい会議となるよう十分な配慮を行います。また、本人が安心して参加し発言できるようなパートナーのレベルアップを図ります。

※　第８期鳥取県介護保険事業支援計画及び老人福祉計画策定・推進委員会・認知症施策推進分科会の様子（認知症の本人も参加）

### イ　認知症の本人の声を発信する機会の拡大

本人どうしの交流、活き活きと自分らしく行動する認知症の本人と出会うことの影響力はとても大きく、絶望していた本人が気持ちを立て直すきっかけになったり、発信者を見習って自分もカミングアウトできたりするなど、新たな一歩を踏み出す力となっています。

そこで、「本人ミーティング」における認知症の本人の声の発信や、本人どうしで自由に話をし、交流できる場づくりを進め、認知症啓発フォーラムや研修、サポーター養成講座などで本人が講演や発表することや本人からのメッセージやビデオなどを通じて本人の思いを聴くなど、本人の声を発信する機会の拡大を推進します。

＜藤田和子さん＞

鳥取市在住。看護師として勤務中の平成19（2007）年に、アルツハイマー病と診断された。

以来、精力的に講演や執筆活動などを行い、認知症の本人の声を発信し続けている。

一般社団法人日本認知症本人ワーキンググループ代表理事。

＜ロータリークラブの認知症フォーラムで講演する米村功さん＞

米村功さん

米子市在住（60歳）。県の職員として勤務中の令和元年7月に、アルツハイマー病と診断される。診断されたその日に家族と共に鳥取県若年認知症サポートセンターに相談。支援を受けながら令和2年3月末の定年まで勤務し退職する。以後、オレンジカフェ等に関わりながら認知症の本人グループ「山陰ど真ん中」を立ち上げ、共同代表を務めながら講演活動を行い「本人のメッセージ」を発信している。

### ウ　認知症の本人の自主的な活動の推進・支援

認知症になっても自分らしく暮らし続けるために、本人同士の自主的なグループづくりを進め、本人ひとり一人が今やりたいことを、パートナーと共に実現する成功体験を持てる活動を支援・推進します。

＜「山陰ど真ん中」の活動の様子＞

## （２）安心して暮らせる共生の地域づくり

### 【現状と分析】

認知症の本人が住み慣れた地域で暮らし続けるためには、安心して認知症になれる地域づくりが不可欠です。

認知症の本人、その家族、地域の人々とが一緒になって、お互いに支え合いながら「共生」の地域づくりを進めることで、認知症の本人だけでなくすべての人が安心して住み続けられる地域をつくることにつながります。

### 【第８期における方向及び対応】

#### ア　地域での拠点づくり及び認知症の本人、その家族、地域の人々と行うユニバーサルデザインのまちづくりの推進

認知症カフェは、認知症の本人や家族が安心できる居場所として、また早期発見、介護者支援、ピアカウンセリング、住民啓発、介護保険サービスへつながる場など、地域のなかで大きな役割が期待できます。カフェに参加することで、認知症の本人と家族だけの閉じた関係が社会化され、安心感を得ることによって本人に自信ができ、他の前向きな活動につながっていくきっかけになっています。

全市町村、ひいては地区単位で認知症カフェができれば、認知症の本人を含め誰でも気軽に行くことができ、地域に根ざした居場所となりうるため、地域の担い手にノウハウを学んでもらうなど、カフェの設置を支援していきます。

認知症カフェは地域の人が運営し、そこで認知症の人や家族などと関わることで、より実効的な学びの場にもなります。普通の喫茶店のように誰でも行けるところで、かつ本人が良い情報を得たり、出会いや繋がりを求めて集まれる場であることが大切です。一時のイベントや認知症の人探しなどではなく、本来の意味のカフェに質を高めていけるよう、各市町村の認知症地域支援推進員などの取組を支援します。

また、認知症カフェで学んだことを活かして、地域の中で住民と介護事業所、専門職などが連携しながら、認知症の人たちと住民や子どもたちが楽しく交流できる場を作り、その交流を通じて認知症の人との関わり方や、もし自分が認知症になったときにどうするかなどを直に学んでいける、地域の拠点や場づくりの取組を支援します。

こうした地域での居場所づくりの推進とともに、例えば、スーパーなどにおける「スローレーン」（支払に時間がかかっても大丈夫なレジ）の設置や、認知症の本人が気軽に周りの人にバス停や駅などを尋ねることができるような、ユニバーサルデザインのまちづくりを推進します。こうした取組は、認知症の人に限らず、誰もが安心して１人で気ままに買物や外出ができるような地域につながります。

#### イ　認知症の本人と伴走する認知症パートナー

本県では千人当たりの認知症サポーター数が全国で２位になるなど、認知症サポーターの養成が進んでいます。今後は、より質の高い講座を目指して、認知症の本人への関わり方や、認知症の本人の声を直接伝えるなど、より実践的な、認知症の本人と伴走するパートナーにつながる講座内容になるよう充実を図ります。

また、小・中学校における「認知症キッズサポーター養成講座」を引き続き推進し、保護者を含め若い世代の啓発を行います。

さらに、認知症サポーター養成講座を基礎として、実際に地域で活動してもらえるような、認知症サポーターのステップアップを図ります。併せて、認知症サポーター養成講座の講師であり、地域のリーダー役としても期待されているキャラバン・メイトの養成及びスキルアップを、引き続き行います。

特に、認知症サポーターステップアップ講座修了者やキャラバン・メイトには、

地域サロンの運営や自主的な住民の学び、見守り活動など、認知症の人や家族と一緒にその地域で有効な活動を考え、地域づくりの担い手のリーダーとして活動してもらえるように、啓発を進めます。

また、認知症の本人が会議などに参加したり、講演や発表などをしたりするために、支えとなるパートナーとなり得るような認知症サポーターのステップアップを図ります。

（参考）認知症キッズサポーター養成講座

### ウ　地域での支え合いの強化

軽度のうちから認知症をオープンにでき、住み慣れた環境で地域住民と一緒に和気あいあいと暮らすことが認知症の悪化予防になることを地域の人たちが知っていて、一緒に活動できる関係性が築けていれば、その後重度化しても地域で支え合い、その関係性のなかで温かく見守られ、そのまま最期を迎えられるという、自然な流れが期待できます。

こうした地域支え合いに向けて、まずは近隣の人をよく知り実際に活動すること、特に自治会などとの関わりのないマンションでは容易に孤立してしまうことから、孤立防止の取組などを進めるなかで、認知症の本人や家族の存在を知り、困りごとの解消など、生活支援につなげていきます。

そのため、市町村がコーディネーターを配置し、地域において把握した認知症の本人の悩みや家族の身近な生活支援等を行う認知症サポーターを中心とした支援者をつなぐ仕組みとして「チームオレンジ」を地域ごとに整備します。

### エ　若年性認知症サポートセンターによる総合的な伴走型支援

鳥取県若年性認知症サポートセンターを運営し、若年性認知症の人や家族からの電話相談や自宅訪問、就労支援、受診同行、集いの場の提供、自分の居場所や役割を見出し、社会とつながるための手助けなど、自立生活に向けた就労と医療と暮らしの総合的な支援を同時並行で行っていきます。

そして、現職の就労継続、その次の福祉的就労、その次の介護保険サービスなど、状況に応じて次のサービスにつなぐ段階で切れ目が生じることのないよう、セーフティネットの１つとして伴走型の支援を行います。

（参考）若年性認知症サポートセンターの活動

（１）若年性認知症の人と家族からの相談対応・支援

若年性認知症の本人・家族から電話で相談を受け、面会後、東部・中部・西部のそれぞれの若年性認知症支援コーディネーターが、専門医の受診、就労支援、介護保険の利用といった様々な相談に対応。

また、若年認知症の支援を行う関係機関（医療、介護、家族の会、行政関係者等）で構成される若年性認知症自立支援ネットワーク会議を開催し、若年認知症支援に関する課題等を整理し、今後の対応について協議・検討します。

【相談内容の例】
・病院との連携
（主治医や地域の病院を紹介してほしい）
・日常の介護について
・病気について　　・就労について
・経済的な問題　　・身体の不調について
・介護サービス、障がい者サービスの利用について

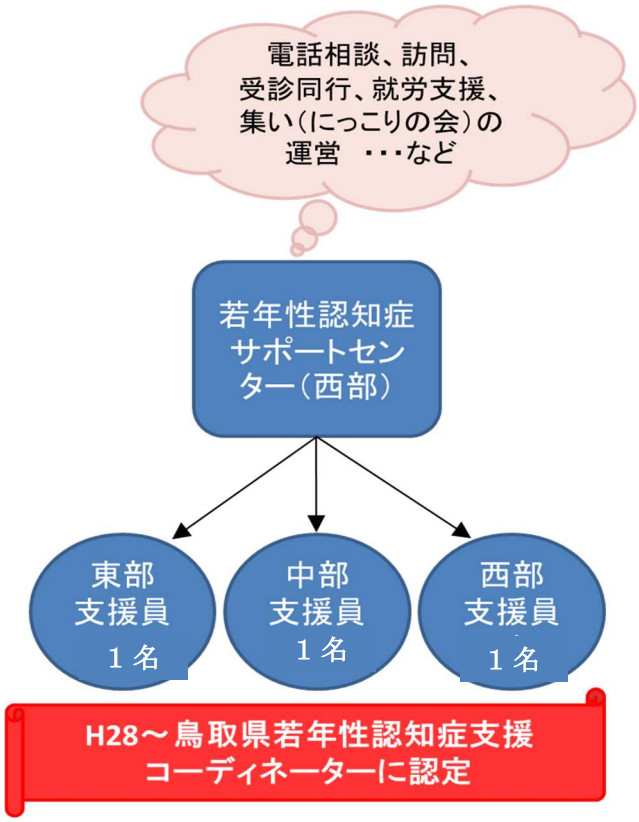



写真　差替え予定

就労支援のケア会議の様子

（２）認知症の本人と家族の集いの場（にっこりの会）
西部、東部・中部で隔月に開催。

写真、差替え

写真、差替え

**オ　安心して地域で暮らせる見守りの体制**

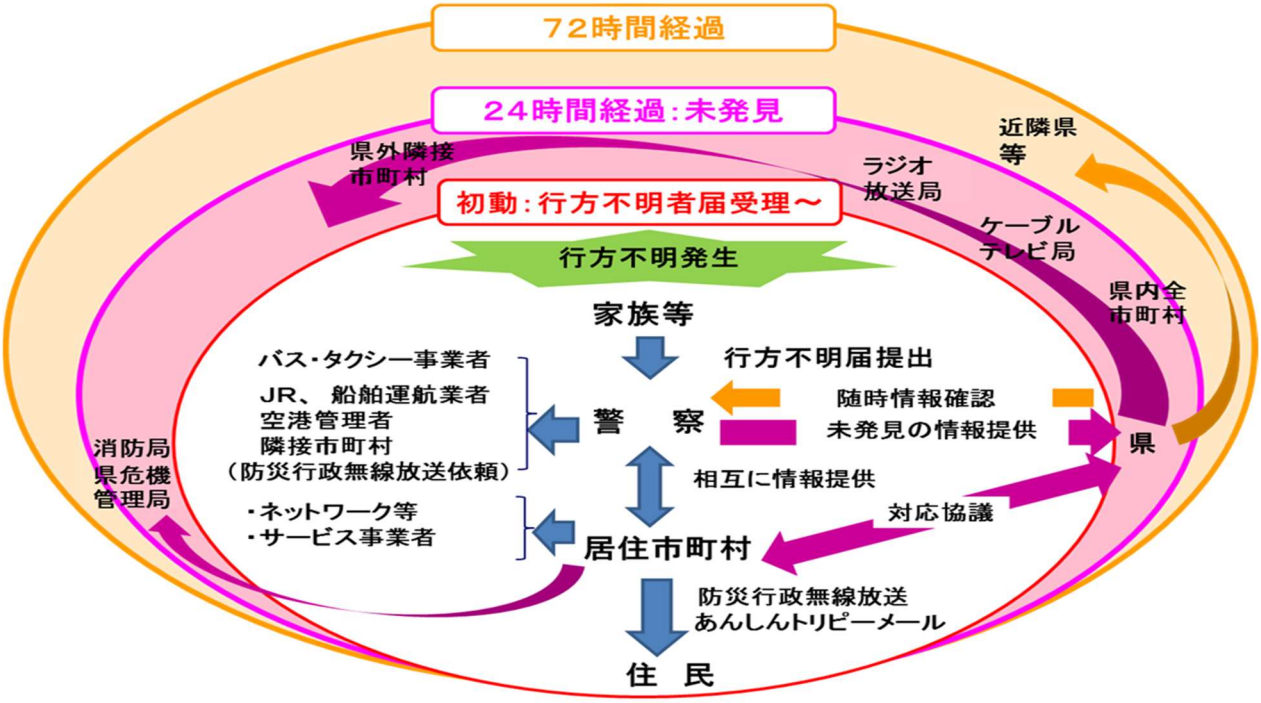
認知症高齢者等が外出したまま行方不明となる事例が、県内でも発生しています。行方不明者をなるべく早く発見するには地域ぐるみの対応が不可欠であり、地域における体制整備が必要です。

そのため、市町村域を越えた連携も重要になるため、全市町村・警察等で構成する「認知症高齢者等ＳＯＳ・サポートネットワーク推進連絡会議」を設置し、速やかな情報共有や捜索体制の構築を推進しています。

また、市町村の「認知症高齢者等事前登録制度」、「認知症行方不明者の捜索模擬訓練」等の取り組みを支援、推進します。

認知症の症状がある高齢者の自動車運転については、県内（東部・中部・西部）の運転免許センターに看護師を配置して相談できる体制を取っています。

（参考）安心して地域で暮らせる見守りの体制




| 区　分 | | 参　加　開　始　時　点 | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 初動：行方不明届受理～ | 24時間経過 | 72時間経過 |
| 参加機関 | 実施関係機関 | ・県警　・該当市町村<br>（・市町村が持つネットワーク等）<br>・地域包括支援ｾﾝﾀｰ（・消防局） | ・県長寿社会課<br>（・県消防防災航空センター、消防防災課） | |
| | 協力機関 | ・バス・タクシー事業者<br>・JR西日本、県内空港、隠岐汽船<br>・行方不明者の居住する市町村のサービス事業者（通所、ヘルパー）<br>・隣接する市町村（県外含む） | ・県内ケーブルテレビ放送局、ラジオ放送局<br>・県内全市町村<br>・可能性のある隣接県 | ・近隣県等 |

## （３）認知症の気づきから切れ目のないサポート体制づくり

### 【現状と分析】

介護保険サービスの対象期間だけではなく、認知症との出会いから総合的にトータルな形で認知症施策を考え、切れ目のないサポート体制を作っていく必要があります。

特に、介護保険サービスの前後の部分の支援、すなわち認知症に気づいてから認知症の診断を受け、介護保険サービスにつながるまでの暮らしの支援、及び認知症の人の最期や看取りをどう考えるかについて、検討が必要です。

### 【第８期における方向及び対応】

#### ア　気づき・早期受診の促進

認知症は多くの原因疾患が引き起こす症状の１つであり、原因疾患によっては治療可能なものもあるため、原因疾患の鑑別が極めて重要です。

また、日常生活に支障が出てから対応したのでは手遅れになるおそれがあります。早くから治療を受け適切に対応することで、症状の悪化を遅らせ、生活の質を改善することができます。

併せて、本人、家族、職場の人の気づきにより認知症の前段階である軽度認知障がいを見逃さず、認知症にいかに早く気づき、正しく対応するかが大切です。そのために、できるだけ早期に市町村の地域包括支援センターや鳥取県認知症コールセンターへ相談し、受診や暮らし方について理解することの啓発を進めます。

#### イ　認知症とともに住み慣れた地域で安心して暮らし続けるための予防

「認知症の予防」とは、元気なときから認知症について正しい情報を得て、健康長寿で過ごし、認知症になっても安心して暮らせる取り組みのことです。

そのために、認知機能の低下を予防する生活習慣や「とっとり方式の認知症予防プログラム」をはじめ、市町村での取り組みを支援し、推進していきます。

（参考）とっとり方式の取り組みの写真、地域の認知症予防リーダー養成研修の写真を挿入

#### ウ　診断から介護サービスが必要となるまでの期間の支援の強化

周囲が異変に気づくかなり以前から、本人は何らかの違和感を感じていることが多く、その段階での早期受診が重要であることを啓発します。また、市町村におけるスクリーニングの実施及び専門機関への受診を促進します。

ただ、早期診断を受けてもその後のフォローが何もないと、早期絶望に陥ってしまうことになりかねません。診断時に希望が持てるようなアドバイスや、生活支援の仕組みが求められます。

そこで、診断直後に、その後の暮らし方について具体的に相談したり、親身になって話を聴いたり、その人に合った制度や支援につなげられるよう、オレンジドア（認知症の本人による認知症の本人からの相談窓口）等の設置、病院の地域連携室などへの情報提供や連携、医師を始めとする医療従事者への研修、鳥取県認知症コールセンターや鳥取県若年認知症サポートセンターによるきめ細やかなワンストップ相談を継続して行い、医療機関や県民への周知を強化するなど、関係機関が一体となったサポート体制の確立を図ります。

また、本人の力をどのように地域に結びつけて居場所や役割を作っていけるか市町村などと連携して検討します。

取組にあたっては、状態に応じた適切な支援制度の流れを示す「認知症ケアパス」（※）の作成を進め、本人や介護家族等、当事者によるガイドを作成・提示するなど、安心して暮らし続けられる環境整備を進めます。

併せて、認知症の本人による本人ミーティングやグループの活動、認知症カフェ（オレンジカフェ）や認知症の人が参加する地域サロン、認知症予防教室など、地域における中間支援の取組を強化していきます。

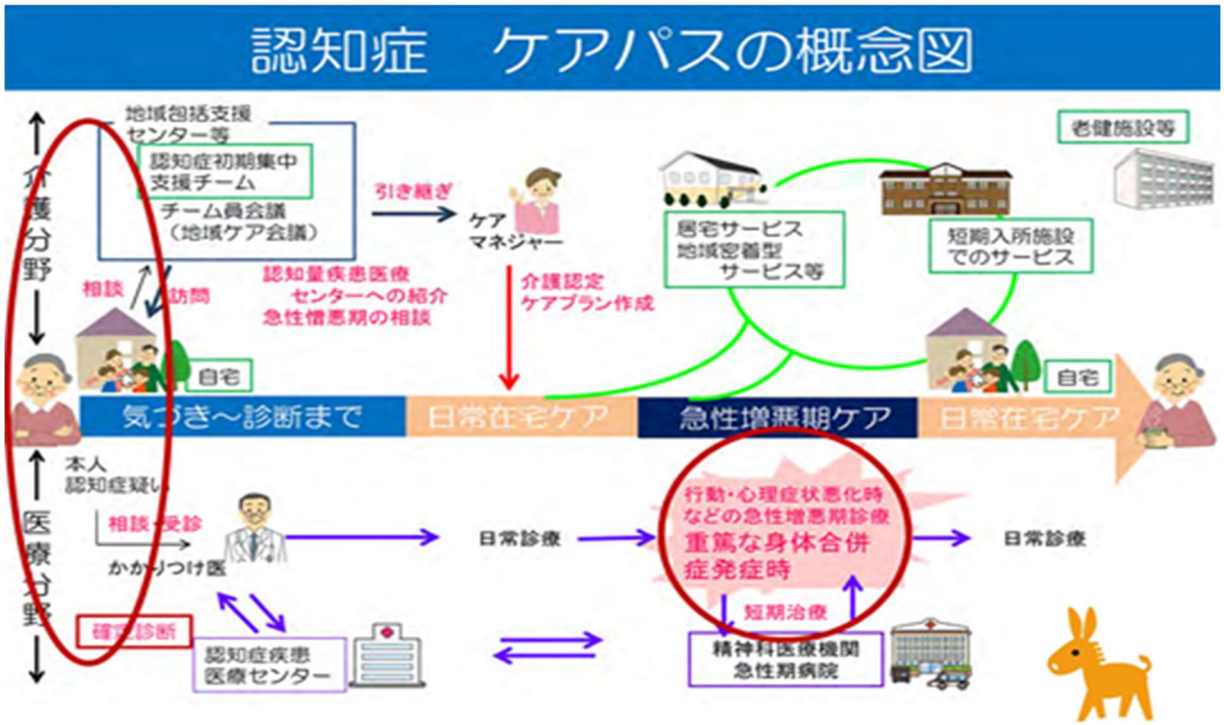
特に、診断後の暮らしの支援として、介護保険サービスにただつなげるのではなく、本人の暮らしそのものを支援していくという視点を、医療・介護・福祉の関係者すべてが持てるよう、多職種協働で優良事例集を作成するなどの意識啓発を行います。

また、認知症カフェなどで得た信頼関係から次のステップにつなげたり、専門職もカフェなどで得た関係性などを大事にしながら、暮らしを支えていくことにつなげたりできるよう、接続を意識した切れ目のないサポート体制づくりをめざします。

※　認知症ケアパス

認知症の容態に応じた適切なサービス提供の流れ。発症予防から人生の最終段階まで、生活機能障がいの進行状況に合わせ、いつ、どこで、どのような医療・介護サービスを受ければよいのか、これらの流れをあらかじめ標準的に示したもの。

（参考）認知症ケアパスの概念図



（参考）認知症カフェ　本人ミーティング　の写真

鳥取市【つながるカフェ】
○運営：鳥取市認知症地域支援推進員
○開催：毎月第３水曜日 11:00～14:00

写真、差替え

琴浦
○運

○開　　15:30

米子
○運営：認知症の人と家族の会鳥取県支部
○開催：毎週火曜日 11:00～15:00

ど】

○開催：毎月第２，３土曜日 10:00～12:00
第４土曜日　　13:30～15:30

### エ　認知症医療連携の体制の強化、認知症疾患医療センターにおけるピアサポート推進

認知症疾患医療センター、認知症サポート医、かかりつけ医等と連携して、認知症の早期診断と対応のため、認知症疾患医療連携体制の強化を図ります。

日頃から受診する診療所等の主治医（かかりつけ医）に対し、適切な認知症診療の知識・技術や認知症の人とその家族を支える知識と方法を習得するための研修を継続して実施することにより、認知症サポート医との連携のもと、認知症の人に対する発症初期からの支援体制の構築を図ります。

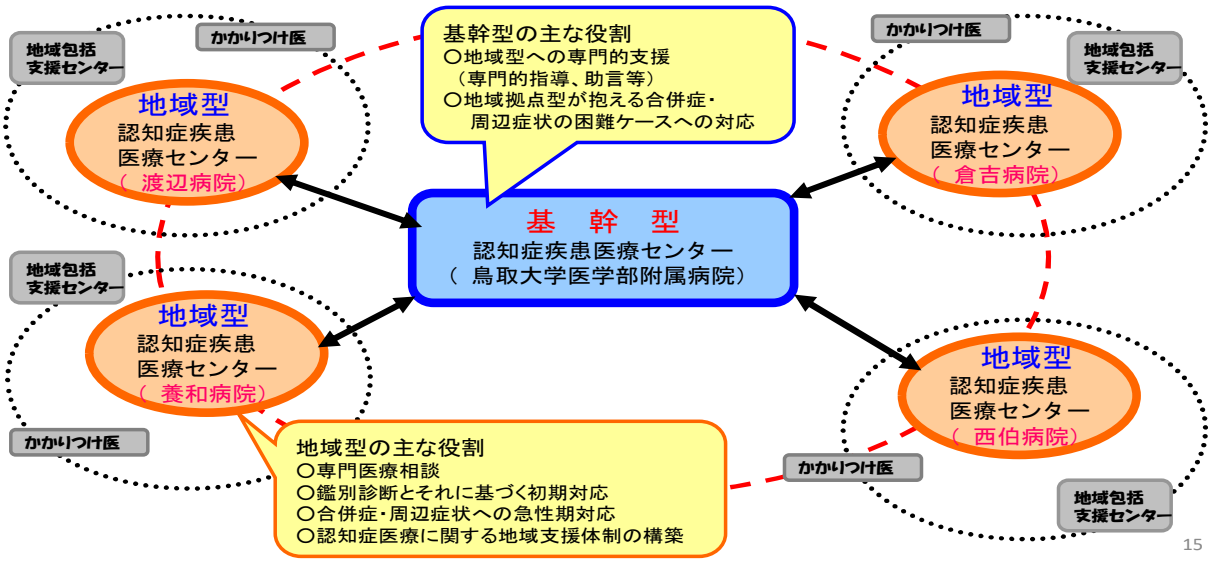
また、かかりつけ医への研修・助言その他支援を行い、専門医療機関や地域包括支援センター等との連携を推進する等、認知症に係る地域支援体制構築の中核的な役割を担う「認知症サポート医」の養成を継続して行います。

そして、認知症に関する詳しい鑑別診断、行動・心理症状や身体の合併症への対応、専門医療相談などを行う医療機関である「認知症疾患医療センター」について、鳥取大学医学部附属病院を基幹型センターとし、医療圏域ごとに１～２箇所地域型センターを配置する現体制を継続し、かかりつけ医や介護・福祉施設、地域包括支援センターなどと連携し、地域の中で認知症の人に適切な専門医療を提供するとともに、認知症の本人、家族の暮らしにかかわる当事者によるピアサポートを推進します。

併せて、病院勤務の医療従事者や、看護師、歯科医師、薬剤師に対し、認知症の本人の視点に重点を置いた認知症ケアや、医療と介護の連携の重要性等を学ぶ研修を実施し人材育成を行うことにより、認知症の本人に対する適切な対応のレベルアップを図っていきます。

（参考）鳥取県認知症疾患医療センターとの連携図

(1) 基幹型（鳥取大学医学部附属病院）
・診断が難しい事例の確定診断や重篤患者の受け入れ、研修会や事例検討会の開催など、高度で専門的な問題に対応
・空床は1床（365日、24時間）確保
(2) 地域拠点型（渡辺病院、倉吉病院、養和病院、西伯病院）
・専門医療を提供しながら、かかりつけ医との連携や介護体制との連携を行うなど、地域に密着した医療提供体制を整える
・認知症の専門的な診断を行い、身体合併症も対応可能な、精神科病院を指定。




### オ　認知症初期集中支援チーム及び認知症地域支援推進員の強化

認知症初期集中支援チーム及び認知症地域支援推進員が、市町村による地域支援事業の一つに位置付けられ、すべての市町村に設置されています。

認知症初期集中支援チームは、認知症サポート医である医師と、医療・介護の専門職（保健師、介護福祉士等）からなるチームが、認知症が疑われる人や認知症の人及び家族を訪問し、受診勧奨などの初期支援を集中的に行うことで、自立

生活のサポートを行います。受診拒否等医療に結びつかない人などに対し、複数の専門職が自宅を訪問し、多職種による総合的なアセスメントや家族支援などを、なるべく早期の段階で集中的に行っていくチームです。

また、認知症地域支援推進員も、認知症が疑われる人や認知症の人を把握・訪問して、状態に応じた適切な医療・介護サービスに結び付けるなどの取組を行います。市町村の認知症施策・支援、認知症カフェの開設・運営の推進役として、地域の支援者や支援機関の連携の要となり、地域資源の有機的な連携を図りながら、認知症の本人への効果的な相談支援を推進していく専門員です。

いずれも、認知症の本人が適切なサービス提供の流れ（認知症ケアパス）に乗れるよう、医療・介護サービスや地域資源などへ、なるべく早く適切につなぐための重要な役割を担っています。県内全域でその機能が十分に活かされ、さらにレベルアップが図られるよう、県外研修への派遣や先進事例の紹介、県内の初期集中支援チーム・認知症地域支援推進員どうしの情報交換の場の設定など、県として市町村の取組を支援していきます。

### カ　認知症のエンド・オブ・ライフケアの推進

支援者が認知症の本人となるべく早い段階で出会い、最期まで充実した関わりができることが、本人との豊かな時間を作り、関係を切らずに本人の強みを活かして支え、本人の思いに沿った看取りの実現につながります。早い段階から最期まで、一緒に伴走できるような仕組みづくりを検討します。

また、リビング・ウィルなど、終末期の医療と介護に係る本人の希望を、認知症の軽度の段階で把握しておくことの重要性を啓発します。

併せて、認知症の終末期に対応できる在宅医療体制（訪問診療、訪問看護等）と介護体制の充実を図ります。例えば、訪問看護師が認知症の早い段階からなじみになり、医療行為だけではなく本人や家族の暮らしやケアも含めて最期まで支えになれるような人材育成を図ります。

特にひとり暮らしの人は、認知症の終末期に自宅で暮らし続けるのは難しい現状にありますが、今後ひとり暮らしの増加が見込まれるなか、在宅生活を望む人が自宅かそれに近い環境で暮らせる工夫など、本人の思いに添った生を全うできるよう支援していきます。

## （４）認知症の人を介護する家族への支援

①認知症に関する会議や研修において介護家族の生の声を直接聴く機会を増やすなど、認知症介護家族への理解を進めます。

②家族が認知症になっても介護で仕事を辞めなくてもよいように、できるだけ早期に市町村の地域包括支援センターや鳥取県認知症コールセンター、鳥取県若年認知症サポートセンターへ相談し、受診や暮らし方について理解することの啓発を進めます。

③認知症の人を介護する家族の形態も、遠距離介護、男性介護者、子育てと介護・介護と孫支援などのダブルケア、18歳未満の子どもが介護するヤングケアラー等多様化してきていることから、鳥取県認知症コールセンター等のワンストップ相談を充実するとともに、認知症介護家族ガイドの作成配布、介護家族のつどい、認知症カフェ等の社会資源とつながることを推進します。

④本県では、認知症介護家族の集いが全国で唯一全市町村で毎月実施されているなど、家族の集いの普及が進んでいます。同じ市町村の家族同士が集い、身近に相談し合える体制を確保するため、集いの意見交換会を引き続き実施するなど、認知症の人の家族の負担軽減に向けた取組を推進します。

⑤認知症の人や家族を地域で支えていくため、認知症家族介護経験者を対象に、認知症介護家族の自宅を訪問して悩みを聞く等のサポートを行う「認知症家族サポート応援隊」を養成し、派遣依頼を受けて自宅へ出向き話を聴くことで、介護家

族の集いなどに出かけることが難しい家族の支援や、孤立防止の取組を推進します。

⑥全国的に要介護者による高齢者虐待の加害者は男性が多く、被害者は認知症の女性が多い傾向にあります。介護者の 3 人に 1 人が男性となり、今後も増えていくことが予測される中、介護をひとりで抱え込み、孤立しがちな男性介護者への支援が求められています。西部圏域で開催されている「男性介護者のつどい」を県内に広げるなど、男性介護者への支援を進めます。

（参考）介護家族の集い